



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Amanda Vickery, The Gentleman's Daughter : Women's Lives in Georgian England, Yale University Press, New Haven & London, 1998, 436pp
Author(s)	林, ちづる
Citation	西洋史論集, 3, 85-92
Issue Date	2000-03-08
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37435
Type	departmental bulletin paper
File Information	3_85-92.pdf



Amanda Vickery, *The Gentleman's Daughter: Women's Lives in Georgian England*, Yale University Press, New Haven & London, 1998, 436 pp.

林 ちづる

はじめに

本書『ジェントルマンの娘』は、一八世紀イギリスにおけるジェントリ層の女性をとりまく生活をテーマの中心にすえた社会史として、一昨年以上梓された研究書である。一八世紀の女性像は、文学に女性が登場する場合や、上流貴族階級に属する女性に光があてられる以外、歴史研究の対象となることは少なかった。本書に登場する主役たちは、法律家・商人・ジェントリの妻、娘、姉妹たちである。著者アマンダ・ヴィカリーは、彼女らに共有される観念、経験、行動様式、慣習、生活様式を、その生活に密接に結びついた記述から考察した。商業・専門職にかかわりのあるジェントリ層に焦点をしばり、その階層を「ジェンティール層」the genteelと名付けている。

著者のもくろみは、富裕層の男性と女性の日常世界が、この時代に家庭と労働の二つの領域に分離したという、現在、広範に流布している見解への挑戦である。著者はそのために、イギリスの地方に居住す

る百人におよぶこの階層の女性が残した書簡、日記、金銭出納帳を史料として利用する。女性自身による記述を駆使して、一八世紀から一九世紀初頭にかけて、女性の経験が形づくる私的領域は縮小したという通説に議論を挑み、これをくつがえすことをめざしている。

これまでの正統的な理解に反して、一八世紀は女性の自由が失われていったときでもなく、家庭を避難所として女性があらたに退却をはじめた時代というのでもなかったと、著者は主張する。ジョージ王期をつうじて、ジェンティール層の女性は、社会的でかつ情緒にみちた役割をみずから選びとってきた。貧欲に読みかつ書くことで、教区や地方の境界をこえて、社会と知性の地平線をひろげてきたという。

こうした女性の存在を、どのような角度から分析しようとするのか、考察の手がかりに目次をしめそう。

序 文

- 第一章 ジェンティリティ (Gentility)
- 第二章 愛情と義務 (Love and Duty)
- 第三章 忍耐と運命の甘受 (Fortitude and Resignation)
- 第四章 儉約的経済 (Prudent Economy)
- 第五章 優雅 (Elegance)
- 第六章 礼儀と不作法 (Civility and Vulgarity)
- 第七章 たしなみ (Propriety)
- 結 び

この時代の女性の情況にむけた共通した評価にたいし、著者の批判はどのような展開をしめすのか、著者ヴィカリーの問題設定のありかと、本書『ジェントルマンの娘』の具体的内容を提示したうえで、最後に考察をこころみる。

一 問題の所在

著者ヴィカリーは本書を、詳細な日常的叙述にみちた個人的な手稿から、どのような歴史が描けるのかという問いかけからはじめる。女性の受動的立場を示唆する言説が優勢となり、「家庭への愛着」*dear's feeling*という語により女性への包囲も強まるというように、一六世紀から一九世紀にかけてのイギリスにおける富裕層の女性の地位について、「衰退」*decline*や「下落」*fall*という語をともなつて論じられることが多くなるという。

一六世紀および一七世紀初期の職人や製造業者の妻たちは、家内での生産活動にたいする参加、貢献が可能であったが、工業化の過程で進行した住居と労働空間の分離と、経済的な富の増大が、ともに女性を労働からしめだす原因としてはたらいだ。生産的労働からはなれた女性は、怠惰なたしなみに没頭する。とくに一七世紀の地主階級の女性は、遊惰な、贅沢な生活を送るようになった。女性が生産的労働からはなれるや、女性の生活はとるに足らないもの、無価値な行為へと結びつけられてゆく。

有益な労働からの女性の離脱は、経済活動に邁進する新しい男性と

手をたずさえた、「新しい家庭婦人」を誕生させる。この新しい家庭的婦人像が、ブルジョワ的な特質の典型であるか、中流層と地主階級の飾りものにすぎないのかは、議論をまつところであるが、当時隆盛となる出版文化の公的領域に接し、そこに現れる表象的言説にかかわるうちに、イギリスの上流、中流層の女性は、私的領域としての家庭に取り込まれていく。

なかでも著者がその影響力を認める歴史的見解は、一七八〇年から一八五〇年までのあいだに「分離された領域」*separate spheres*が構築されてゆく^①、というものである。男性と女性の日常世界は、この時期に進展する工業化、資本主義化と、それにとまう階級社会の登場の結果として、男性が自由な経済活動を謳歌する公的領域と、家庭的な女性らしさにみちた私的な領域との、二つの領域に分離される。特権階級の女性は、企業経営や所領管理などの経済活動からはなれ、生産的家事も家事使用人にゆすりわたし、みずから装飾的な地位にあまじるようになった。経済的目的や公的な責任をうばいとられた女性は、家庭というせまい領域に押しこまれ、男性の庇護がなければ存在できないようなひ弱な女性像を附加される。

以上のような一八世紀、一九世紀のイギリス女性に、それ以前の時代との大きな変化をみいだす通説に対し、著者は以下の反駁をくわえる。第一に、商業革命、産業革命が新しいジェンダー秩序をつくりあげたという説は、その議論の設定対象とする時期に疑問がある。近年の経済史の研究によると、イギリスの工業的、商業的变化は、短期間に革命的激変をみたのではなく、一五世紀以来おだやかに進展して

きた、という立場を著者はとる。女性による経済活動が、一七〇〇年から一八五〇年にかけて衰退したという説にも、以下の二点で批判をくわえる。①一六世紀から、職住の分離した産業は多く存在し、一九世紀中頃でさえ、工場のみが一般的な生産形態ではなかった。②一五世紀と一八世紀の女性が就業していた産業を比較しても、その業種の変化よりも継続が目につく。以上の理由で、女性の威信が高く、高収入をもたらす広範な職業に女性が就いていた「黄金時代」golden ageが存在したというのは、幻想にすぎないと結論づける。

第二に、「家庭への愛着」domesticityをめぐる説についても異議を唱える。女性のイメージは世紀ごとに聖と悪の両極を振幅するものであったし、貞節、服従は古来からの女性の美德であり、救済者としての女性像も宮廷風求愛の時代までさかのぼることができる。分離した領域を強調する説教じみた言説が増えたことは、ジョージ王期、ヴィクトリア朝を通じて女性の活動への願望、その機会、経験が拡大したことへの感情的な反応と言えるのではないか。こうした説を重ねて、著者は「分離した領域」separate spheresが、分析枠組みとして有効に女性の生活を説明するものとなりうるのかを、最終的に問いかけるのである。

さらに著者は続けて次のように述べる。二〇世紀に到達するまでに、一九世紀のフェミニストが闘いとうとした完全な市民権を手に入っていた世紀は、どんな時代にも存在しなかった。公と私の領域が分離していたというのは、どの世紀どの時代にもあてはまるだろう。男性が社会制度内でより広範な認知と報酬をえる一方で、女性は子ど

もと家庭で過ごすことを余儀なくされるという状況は、古代にさかのぼって存在すると同時に現在にまで継続する現象である。こうした普遍的なジェンダーの役割を、特定の関係と認識して、特定の社会グループ、国家、時代に関係づけるべきではない、と主張する。

こうした議論から導きだされた著者の研究方法は、生物学的にも家族の役割としても、限界をもつ役割のなかで生きていた専門職、商業、ジェントリ層の女性の生活に目を向けることであった。彼女たちが実際にしるした手紙と日記から、彼女たちの言葉で家族、社会関係のなかでの女性の役割、心性を再構築しようと試みた。

これまで著者の執筆目的をめぐる議論を追ってきたが、既存研究を概観するなかから著者が導き出した論点は、以下の三点に要約できるであろう。まず、第一点は著者の選択した史料にかかわる点、第二点は、「分離された領域」という概念が分析枠組みとして正当性をもつものだろうかという疑問、そして第三点は、一八世紀、一九世紀にかけての産業革命期に公・私の分離が明示化され、女性は私的な領域にせめられていった、というよく知られた見解に対する批判、この三点である。著者の視点から抽出したこの三点を主要な論点として、本書の内容を紹介したい。

二 『ジェントルマンの娘』の生活

(一) 史料としての手稿

本著は、ジェントリ層出身のひとりの女性の手記から筆がおこされている。まず、女性自身による書簡、日記、出納帳を史料としたことを記している。著者の史料にたいする問題関心は、著者の論考「分離された領域の黄金時代？」²で明らかにされている。いままでの史料は、聖職者の説教集、家事の指南書といった、女性に規範をあたえる目的で書かれたものを使用することが多く、女性の生活や行動を規定していた規範を解釈することが中心となり、女性自身がどう感じ取っていたかにはふれられることが少なかった。印刷物を中心とする公共圏に循環する言説は、圧倒的に男性によって発せられたもので、女性によるものは少ない、あったとしても、文学、助言集など偏りがみられる。

著者は、女性がおかれた状況を女性の視点からみるために、いままでの男性からの視点を切り捨て、女性によって書かれた史料のみを利用する。そのために、幅広い史料蒐集がおこなわれたが、なかでも突出して多くの手稿を残した女性の存在が大きい。

こうして女性の書き物に接することで、家族の絆、家族の記憶、など女性自身によって紡がれた言葉で織り上げられた複雑な経験を理解することができると。なかでも、結婚、出産、家政管理にかんして詳しく述べよう。

一八世紀にはいると、聖なる秘蹟としての結婚が教会の管理の手からはなれ、ロマンティックな結婚が世俗の世界で賞賛されるようになった。恋愛を重んずるという新たなイデオロギーが芽生え、結婚相手の選択にあたって、子どもの意志を尊重する傾向が、かすかではありながら出現する。だが、本来家父長制がもつ、子どもへの拘束力が弱まったわけでは決していない。それは女性の内面に潜りこみ、女性を律する義務感となって、愛情と手に手を取って女性を祭壇へと導くはたらきをした。娘たちは、感性豊かな女性であるとともに、自分が属する階級と、未来の生活にふさわしい配偶者を選ぶことのできる、合理的判断力をあわせもつことが要求された。伝統的な親族関係のなかに、愛情によるつながりがもちこまれた。だが一八世紀のジェントリ層の価値観に、「女性化」の側面をくわえたかのようにみえる結婚の条件も、愛情と計算高さとのふたつの要素がつくるバランスのうえに成立しない限り、幸福とは無縁であった。当時の女性はこうした矛盾のなかで、とるべき行為をよくわきまえていたことが、彼女たちの証言からうかがいあがる。

一八世紀の上流女性にとり、出産は刑罰のようにおそれられていたことは、よく知られている。それが女性に死をもたらす大事業であったことも確かであるが、一方で子どもの誕生が、男女間の情緒的結びつきを深めたのも事実である。婚姻による伴侶関係を取り結ぶなかで、価値観の「女性化」が生み出した精神的結びつきの重視が、「子どもの誕生」を愛情を持って迎え入れるという、新しい気風をつくりあげた。この時代の「核」家族という家族形態が、子どもを中心とし

た情緒的な絆の発達をうながしたとも言えよう。さらに、結婚後の女性たちは、通信の輪を広げて、妊娠、出産、子育ての情報を頻繁に交換しはじめる。この情報のネットワークは、地方に住むジェントリの女性の生活空間を大きくこえるものであったし、その頻度、量ともに、一八世紀の女性たちは過去にない太い情報のパイプを手にするようになる。

子育てにかんしても、母親の育児の責任は、子どもの幼年時代に限られるとか、この階層の女性には子育てに関心をしめさなかったと紹介されることが多い。しかし、母乳育児に言及する多くの書簡がその関心の高さを示し、母乳育児のもたらす功罪とともに、乳母の資質にまで言及している。幾多の女性が子どもの成長とともに、かれらの年齢や活動にふさわしい助言にみちた書簡をおくり、かれらの結婚後も子どもの男女をとわずその生活に心をくだしている。子どもの徒弟費用を用意するために、母親は所領収入のやりくりをし、装身具の売却までして費用を捻出している。情緒的な結びつきだけでなく、経済的な援助も母親がつかさどっていたことがしめされて、子育てには無関心で権限もない一八世紀の上流階級の母親という、誤った認識がたださるはずである。

『ジェントルマンの娘』の特徴として、百人におよぶ女性の証言がその経験を多面的に描出させている。さらにまとまった数の書簡、膨大な量の手稿をのこしたひとりの女性により、家政経済の輪郭も数量的に把握することが可能となった。この女性はエリザベス・シャクル

トン Elizabeth Shackleton (一七二六～八二) といい、織物業で成功したのちヨークシャーの土地を相続した商人の娘である。みずからもジェントリ層に嫁し、二度目の結婚生活の後半一九年間で、数千の手紙と、三九冊の日記を残した。この日記から描きだされたジェントリの家政管理は、いまだ肉体労働に多くを依存しており、家事使用人の援助がなければ円滑に運営されえないものであった。さらにその家事使用人の管理も、わずらわしく面倒な仕事であった。シャクルトン家の家政規模では常時必要な使用人は七、八人を越えることはなかったが、その定着率は非常に低いものであった。ほぼ一年間で四〇人近い女性が、家事使用人としてこのジェントリの屋敷に出入りした。その雇用期間はわずか二、三日から数ヶ月間とさまざまであったが、一年をこえるものはまれであった。その雇用形態から、家事使用人として雇用される階層の女性たちも、みずから雇用を解消する権利をもっていたことがわかり、上下二つの階層の女性間での力の駆け引きがのぞき見られて興味深い。だが、雇用主であるジェントリ層の女性にとり、新しい使用人を探しだし彼女らに教育をほどこす役目は、想像以上に煩雑なものであった。この使用人を補充する場合にも、女性同士のネットワークは活用された。家事使用人の管理の責任は、男性の使用人ないし徒弟は夫の管轄で、女性の家事使用人の管理のみが主婦の権限であった。男女の責任の境界線は、この場合はつきり男と女の世界で分断されている。

家政のなかで消費財の購入は、女性にまかされた家事のなかでも最も経済的要素の強い仕事であった。一八世紀にはまだ完成品を購入す

るよりも、半製品や原料を購入して、家内で完成品につくり変えることが多くおこなわれていたため、それらの在庫管理、注文、経済的処理などは女性の綿密な管理のもとにおかれ、彼女たちが日常的に目録に記録したり出納帳をつけることは、家政管理上不可欠な行為であった。彼女たちが作成した精緻な目録は、一八世紀の市場で活躍する男性に広く認められる計測、計算、統計といった数量化への熱意を、女性たちも分かちもっていたことの証と言えるであろう。

こうした史料からあらわれる女性の生活のなかで、女性はみずからをどのようにとらえていたのだろうか。彼女たちは家父長制の枠組みに反抗しても、何もえるものがないことをよく理解していた。だがそれは自分たちが活動する領域を従属的なものと受け取るのではなく、女性が女性らしさを、そしてそれにとどまらず、人間としての気高さを生かせる世界として肯定的に受け取っていた。自分の責任ある領域に自覚して立ち向かっているからこそ、任された仕事に対する理不尽な介入が男性側からなされると、怒りをもって反応した。そこにあるのは専制的な男性の抑圧にたいし、家庭内で盲目的に服従するといった姿ではなく、自分の活動の領域では徹底的に支配的にふるまう女性の姿である。だがそれは、より下位の階層に対しては、富と支配力を後ろ盾に、抑圧的にふるまう男性の姿と重なるものでもあった。

(二) 公私の領域に対する当時の女性の考え方

この問題を考察する前に、著者ヴィカリーが強調している論点をあげておきたい。この時代の女性は自分たちがどのような空間に生きて

いたか、彼女たちの認識を検討するさい、この時代の人びとが把握していた言葉の意味に依拠したうえで理解しなくてはいけない、というのが著者のたび重なる主張である。ここで「公的な」publicという語に注目して本書の事例のなかから当時の女性は「公的な」空間をどのようなものとして意識していたのかを探ってみよう。

この時代は「イギリス都市ルネサンス」と呼ばれ、都市の文化的生活が強調され、整備された外観としても、そのなかでおこなわれる催しとしても大いににぎわった時期に当たる。経済的な上昇を続ける中流、上流階層を背景に、多くの公共施設や娯楽施設が開かれた。そうした施設で開催される行事には、女性の参加は当然のものと考えられていた。それらは、四季裁判所、定期演奏会、巡回図書館、都市の遊歩道、娯楽庭園や遊園地といった催しで、とくに劇場は、その空間を、最上層の貴族たち、とりわけ王室とそれにつらなる人々と共有できる空間として特別の重要性が附加されていた。当時の女性はこうした開かれた空間に参加し、その空間を共有し、参加者を相互に視覚的にとらえることで、「公的な」行動と認識していた。

一方、家庭でおこなわれる催しも、個人的な招待状によるごく少数の同階層の家族の招待以外は、「公的な」集まりと認識されていた。毎年おこなわれる収穫のあとの借地農を招いた食事会、近隣のジェントリ層の男性を狩におくりだす前の朝餉の集まり、こうした催しは、参加者の階層、男女にかかわらず、主催者の女性は多くの人々に開かれた「公的なもの」として認識していたのであった。こうした地域の名望家としてのパトロンのな行為も、ジェントリ層の女性の重要な資

質が試される場として女性たちはとらえていた。

このように、近隣の貴顕が一同に会する行事の中心に身を置き、重層的な階層が出入りする集会をみずから催していた当時の女性たちは、その中で生活は親密さよりも礼儀正しさがまさっていたとしても、自分たちの日常が私的な空間に閉ざされ、日々の行動が従属的な行為などとは微塵も思っていないかった。

おわりに

本書『ジェントルマンの娘』の内容から、執筆目的を説明するにたる具体的な箇所を提示してきた。以下著者の掲げた三点を選択して若干の考察をくわえる。

まず、史料に関してのべると、女性の手になる豊富な史料により、いままで提示しえなかった女性の内面にせまることができたことはあきらかであろう。だが、当然のことながら、女性が女性の手で書き記した言葉にも、男性の象徴的な支配の力が加わっていることを考えなくてはならない。女性史に坎んして、女性の言説さえ用いれば、女性のものに見方に接近できると単純に著者が考えているわけではない。だが、女性たちの言葉によって客体化された秩序のなかに、どのような男性支配の影響を読みとるか、そうした著者の認識は、いまひとつ不鮮明なのではないか。

当時の識字率の問題や長期の保管を許す経済的な状況から、残された史料はジェントリ層の女性のものに限定されていた。いままで詳しく取り上げられなかった階層の女性の生活を詳細に復元して光をあて

た功績は大きい。だが、一八世紀から一九世紀にかけて女性の従属が強化されたという場合、その状況を担うのは中産階級の女性であるとして、中流の女性に焦点を合わせた研究が多い。属する階級の全く同一でない女性の研究を用意して、著者が批判の対象としているこれまでの研究に対立させているように見受けられる。

次に、女性の公的な領域からの排除をどのように認識するかという問題である。公的な領域と私的領域との関係が性差を基準に規定されていたという意味で公的な領域（政治的公共圏）からの女性の排除は本質的なものである。女性の意識のなかに「公的な」参加者としての自覚があることは明瞭に理解できるが、これをもって、女性が公共の領域に統合されていたと表現するには、不十分ではないか。つまり、一八世紀の女性が「公的な」領域に参加していたというのは、ハーバースという代表具現的公共圏という伝統的な形式のなかで「よそよそしく非個人的で儀礼的な自己呈示という美的な役割演技の形式」を遂行しているにすぎないようにみえる。したがって、新しい類型の市民的公共圏が成立したあとの、私的領域との関係を論ずるのではなく、伝統的支配における代表具現的公共圏の残存した姿を列挙しているのに終わっているようにみえる点、女性の排除とジェンダーの作用が、公的な領域と階級を構造的につくりあげる力があつたといういままでの見解を批判する前提を提出しえないのではないか。

最後になったが、著者の論点で重要であつた点、女性の従属が強まった時点を一定の時期に結びつけてとらえる見解に対し、女性の従属的地位はいつの時代にもあつたこととして、あるひとつの時代と結

びつけることを批判していた。著者の史料は一八世紀中頃が主体で、一九世紀の史料もごく初期に限定されている。福音主義の復興の動きが激しくなる以前の史料が多く、当然宗教的影響を受けた手稿の取り上げ方も少ない。経済状況も異なるが、さらに宗教運動の影響も異なった時期から、一九世紀にかけて女性の従属の強化は存在しなかったと結論づけるのは難しいのではないか。

いくつか考察をあげたが、この女性たちの豊かな経験と言葉に満ちた本著作が、ジェントリ層の女性の生活と心性を、いままでにない側面から明らかにしたという評価にはかわりない。『ジェントルマンの娘』は、女性史の叙述に鮮やかな一八世紀の女性像を添付するにとどまらず、社会史の多様な領域のなかでもその新鮮さを失うことはないであろう。だが著者アマンダ・ヴィカリーは、こうした評価よりも、ここにしめした議論もとにさらに刺激的な論争がかわされることを望んでいるのではないだろうか。

註

- (1) Leonore Davidoff and Catherine Hall, *Family fortunes: men and women of the English middle class, 1780-1850* (London 1987).
- (2) Amanda Vickery, 'Golden age to separate spheres? A review of the categories and chronology of English women's history', *Historical Journal* 36:2 (1993).
- (3) ロイ・ポーター『イングリランド一八世紀の社会』目羅公和訳、法政大学出版局（一九九六）。
- (4) ユルゲン・ハーバーマス『公共性の構造転換——市民社会の一カテゴリーについての探求』細谷貞雄・山田正行訳、未来社（一九九八）。